

アラビア語における中間構文

ハッサン・エバ
ebahssn@gmail.com

キーワード：中間構文 標準アラビア語 エジプトアラビア語 受身構文 自動詞

要旨

本稿は、標準アラビア語及びエジプトアラビア語の中間構文考察し、構文的・意味的な特徴を提示することを目的とする。標準アラビア語には、受身中間構文、自動詞中間構文、他動詞中間構文の3種類の構文が存在し、EAには、自動詞中間構文及び他動詞中間構文の2種類の中間構文が存在することを主張し、それらの構文上及び意味上の特徴を述べる。

1. はじめに

中間構文(middle construction)の規定には様々な観点またはアプローチがあり、また記述される事象が言語によって異なる。例えば、再帰動詞(例文(1))、認知動詞(例文(2))、相互動詞(例文(3))、自発動詞(例文(4))難易構文(例文(5))などが中間構文のカテゴリーの範疇に入るとされる。

- | | |
|--|----------------|
| 1. Er sieht sich.
he sees ref
He sees himself. | (German) |
| 2. Ego quotidie meditabo-r.
I everyday meditate-ref
I meditate every day. | (Latin) |
| 3. Mereka saling ber-gumul.
they each other ref-wrestle
They wrestle each other. | (B. Indonesia) |
| 4. L'eau s'est évaporée.
def.water ref.be perf.evaporate
The water evaporated. | (French) |
| 5. This book sells well. | (English) |

本稿で扱う中間構文は難易構文(facilitative construction)に絞るが、「～しやすい・しにくい」あるいは「簡単に～できる」などに当たる構文だけでなく、「早く～できる・しっかり～できる」のように事象の様態を表す構文も含む。

このような中間構文は、項の交代が実現されるためヴォイスの一種と考えることができ、本多(2005)では、その機能をアフォーダンスによって説明している。アフォーダンスは現実世界または環境の中に存在する客観性の高いものであり、話者や知覚者の主観性によって構成されるものではないと説明する。つまり、アフォーダンスは、環境に存在するものとそれを知覚する者の関係として成立しているということである。例えば、環境の中に存在する「椅子」というものは、それを知覚する人に対して「座る」という行為を、「空気」というものは「呼吸」をアフォードしているわけである。

以下では、アラビア語における中間構文はどのような形式及び制約などを有するかを考察する。

2. アラビア語¹における中間構文

標準アラビア語（以下ではSAと略す）においては、日本語や英語などのように「中間構文」に当たる構文が特に指摘されておらず、今まで研究対象として取り上げられたことがない。考えられる理由の一つは、それ専用の形態が存在していないことであり、もう一つは、「～が容易・困難である (It is easy/difficult etc. to～)」に当たる構文 'mina[^]ssahli[~]が主に使用されることである。SAにおいては、英語のように、対応する能動文の目的語が中間構文の主語となり、その主語の指示対象の特徴について語る構文は存在しないとされてきた (e.g. Mahmoud (1991: 128))。

Arabic, on the other hand, does not allow for intransitive noneventive constructions, parallel to the English middles.

Mahmoud氏は以下の例文を挙げ、SAにおける中間構文の存在を否定している。

6. a. tarjama zajd-un annas^s's^s-a l-ʕarabiyy-a
3sing.ml.perf.translate Zajd-nom def.text-acc def-Arab-acc
Zayd translated the Arabic text.

b. *ya-ta-tarjama ^nnas^s's^s-u l-ʕarabiyy-u bi-suhu:lat-in
imperf-intr-translate def.text-nom def-Arab-nom with-ease-gen
The Arabic text translated easily.

¹ 標準アラビア語とエジプトアラビア語を示す。

しかし、Mahmoud 氏の主張に対しては二つの疑問がある。一つは、他動詞の translate に対応する自動詞を(6b)の例文の yatatarjama としているが、その形態はそもそも存在しない。つまり、英語の中間構文に対応させ、無理に自動詞を派生させ、SA に中間構文が存在していないことを主張しているが、そもそも英語の自動詞体系は SA のそれとは大きく異なることを考えると、同じ構文の使用を求めることはどこまで有意義なことであろうか。また、SA の自動詞形態は複数存在しており、動詞の意味特徴などにより派生の可能性が左右される。

もう一つの疑問は、構文が存在しているかどうかの決め手が、それ専用の形態が存在しているかどうかのようであり、英語のように目的語が昇格しても能動形態の動詞が用いられるなどという特殊な構文が存在しないため、アラビア語には中間構文が存在しないという結論となる。しかし、フランス語では再帰構文が中間構文として用いられ、日本語では、「レル・ラレル」が用いられる可能構文が中間構文として用いられるように、SA では受身構文や自動詞構文を共有し中間構文として扱うことを指摘したい。

以下で説明するように、中間構文の形態は一つではなく、主語の指示対象が本来対応する能動構文においてどの要素（つまり、目的語、道具など）で表現されるかにより、用いる構文が異なる。

以下では、SA における動詞中間構文の在り方について考察する。

2.1 SA における中間構文

前述したように、中間構文に当たる SA の構文は「～が容易・困難である」という難易構文であり、以下のような構文となる。

7. mina ssahl-i qira:ʔat-u ha:ða ʔl-kita:b-i
 from def.easy-gen reading-nom this def-book-gen
 It is easy to read this book.

8. ha:ða l-kita:b-u sahl-u ʔl-qira:ʔat-i
 this def-book-nom easy-nom def-reading-gen
 This book is easy to read.

9. ha:ða ʔl-kita:b-u yu-qraʔu bi-suhu:lat-in
 this def-book-nom imperf.pass.3sing.ml-read with-easiness-gen
 This book reads easily. (lit: This book is read easily)

上記の3つの例文は基本的に同事象を表すが、例文7,8²は英語の it is easy to~に対応し、本

² それらの例文以外にも似通った構文も存在するが、本稿では省くことにする。

稿で分析したい構文は動詞を使った例文9であり、その類の例文には以下のようなものがある。

10. al-luyat-u ^l-farabiyat-u tu-tarjamu
def-language-nom def-Arabic-nom imperf.pass.3sing.fem-translate
bi-suhu:lat-in
with-ease-gen
Arabic translates easily.
(lit: Arabic is translated easily.)

11. kala:m-u-hu yu-fhamu bi-surfat-in
speech-nom-his imperf.3sing.ml.pass-understand with-speed-gen
His speech can be quickly understood.
(lit: His speech is quickly understood.)

12. qis'as'f-u ha:ða ^l-kita:b-i tu-qra?u
stories-nom this def-book-gen imperf.3sing.pass-read
bi-suhu:lat-in
with-ease-gen
The stories in this book read easily.

13. xuð haðar-a-ka! ha:ðihi ^zzuja:jat-u ta-n-kasiru
take.imp care-acc-your this def.bottle-nom imperf-intr-break
bi-suhu:lat-in ðatta: bidu:n ?an ta-lmisa-ha:
with-ease-gen even if without to imperf.2sing-touch.ml-it.fem
Take care! This bottle breaks easily, even if you don't touch it.

14. mifta:h-u-ka ya-ftaðu ^l-ba:b-a
key-nom-your.ml imperf.3sing.ml-open.tr def-door-acc
bi-suhu:lat-in
with-ease-gen
Your key opens the door easily.

上記の例文(10-14)はそれぞれ、主語の特性について語っており、英語の中間構文に対応するが、用いられる動詞の形態には複数ある。例文(10-12)では、受身形態の動詞が用いられているが、例文(13)では自動詞、例文(14)では他動詞が使われている。使用される動詞の形態は主語の種類によって左右されると考えられる。

【受身中間構文】

SAにおける動詞の受身形態は、動詞の母音を変えることによって、受身専用の形態「受身形」が得られるが、このような形態変化は厳密な意味での形態受身(strict morphological passive)³と呼ばれる(Keenan(1985))。

例文(10-12)では動詞が受身形態であり、見た目は受身構文であるが、以下の特徴を持つ。

- ① 一回的な(eventual)な事態ではなく主語の指示対象について語る構文である。
- ② 受身形態を使ったこの構文が普通の受身構文と異なる点は語順である。SAはVS(O)言語として知られており、SV(O)の語順も(主に口語では)許されるが、動詞を使ったSA中間構文は必ずSVの語順を取る。
- ③ SAの受身構文の意味特徴及び機能：主語に昇格するのは能動構文において影響を被った目的語だけではないため、「対象の焦点化(patient focusing)」(Langacker(1975))よりも指せる範囲の広い「非動作主の焦点化」といった方が適切である(ハッサン2015)。ここで述べる「焦点化」においては、先行するコンテキストにある指示対象を際立たせる必要がある場合、受身構文が用いられその指示対象が主語に昇格することを意味する。また、記述される事象の背景には意図的な動作主が存在が自然に想定される。表示されない動作主は意図を有する者として解釈されるのが最も自然であり、動作主の非意図性を表す表現がない限りは、事象が動作主の意図的な行為により発生したというのが最も自然な解釈である(ハッサン2015)。
- ④ SAの受身構文は動作主の出現を許すが、中間構文の場合は、「だれにも」などという一般的な動作主の出現は不可能となる。

【自動詞中間構文】

自動詞も用いられるが、その場合、受身中間構文と異なり、以下の特徴を持つ。

- ① 主語の指示対象には、該当の事象を成立させる力が潜在しており、動作主のみの力で実現する場合には自動詞が用いられない。例文(13)を考えると、指示対象のボトルは簡単に破壊される性質を持っており、大した力を加えなくてもすぐに壊れるという意味合いの構文である。「簡単に壊れる」ということは一般的に動作主の力が問題になるより主語の指示対象が事象の実現に対する責任があると考えられるため、例文(13')は不自然となる。

³ 厳密な意味での形態受身に対して英語のように、動詞の形態変化と別に補助動詞を求めるものがあり、基本的な迂言的受身(basic periphrastic passive)と呼ばれる。

- 13'. ?xuð haðar-a-ka! ha:ðihi ^zzuja:jat-u
 take.imp care-acc-your this def.bottle-nom
 tu-ksaru bi-suhu:lat-in, hatta: bidu:n ?an
 imperf.3sing.fm.pass-break with-ease-gen even.if without to
 talmisa-ha:
 imperf.touch.2sing.ml-it
 Take care! This bottle is broken easily, even if you don't touch it.

② 自動詞構文においては、動作主が行為連鎖より削除されるため (ハッサン 2015)、動作主の出現が不可能であり、自動詞の形態動詞が用いられた構文でも動作主が表示できない。

このように、自動詞を使った SA の中間構文は、主語の指示対象が持つ特徴により事象が実現されることを表し、動作主の外的力のみによる事象を表すことができないため、例文 (13') は不自然となる。

【他動詞中間構文】

それに対して、例文(14)は英語の疑似中間構文⁴の構造に対応している。この種の構文は主語の指示対象が事象における道具である場合に用いられる。道具の場合、他動詞が用いられるのは道具を agent 化した構文だからであると考えられる。

15. ha:ðihi ^l-furfa:t-u ta-dhinu ^l-ha:?it^h-a
 this def-brush-nom imperf.3sing.fem-paint def-wall-acc
 bi-suhu:lat-in
 with-ease-gen
 This brush paints the wall easily.

16. qalam-u-ka ya-ktubu bi-xat^ht^h-in jami:l-in
 pen-nom-your.ml imperf-write with-handwriting-gen beautiful-gen
 Your pen writes nicely.

ここまでは、今まで分析されなかった SA における中間構文を説明し、主語の種類により使う構文が決まることを説明した。主語の指示対象が外的力のみにより影響を被る事象の対象 (目的語) である場合、受身構文が用いられ、主語の指示対象の内的力によって事象の成立が左右される場合、自動詞構文が用いられるが、agent 化した道具の場合、他動詞構文が用いられる。

⁴ 疑似中間構文とは、行為の対象ではなく、道具が主語に昇格した中間構文のことを言う。

2.2 エジプトアラビア語における中間構文

エジプトアラビア語（以下ではEAと略す）における中間構文については今までは何も述べられていないが、EAにはSAと同様に複数の形態の中間構文が存在することを以下で主張する。

【自動詞構文】

EAでは、他動詞から生産的に自動詞を派生する接辞 *et-* を用いて中間構文を作る。この場合の自動詞とは、「流れる」などのような自発性や（「壊れる」などのように）対象の特性による事象の実現の可能性だけでなく、「盗む」などのように外的力がなくては成り立たない事象においても動作主を削除し事象による変化を表す（ハッサン 2015）。以下の例文を参照されたい。

17. *el-haram biy-et-ja:f men hena*
def-pyramids imperf.ml-intr-see from here
 The pyramids are visible from here.

18. *el-ṣarabiyya di bet-et-sa:? bi-shu:la*
def-car this imperf.fem-intr-drive with-ease
 This car drives easily.

例文(17,18)では、自動詞を生産的に派生する *et-* 接辞が使われるが、*et-* 接辞の本質的な機能がそのまま保持されている。*et-* 中間構文では、動作主が削除され事象の対象が被る変化が焦点化される。ここで述べる「変化」とは、必ずしも物理的な変化とは限らず、焦点化される変化には抽象的なものも含まれる。例文(17)では、ピラミッドがあるところから見える、という新発見を表し、目に見える物理的な変化を表していないが、新しいことを自覚したという認知的な変化を表現すると言ってもよい。また、例文(18)においても、簡単に運転できるというある車に関する評価を表しており、評価の更新という変化と考えてもよい。

このように *et-* 接辞構文の本質的な機能は、動作主の削除とともに変化を表すことである。但し、英語と異なり、副詞が共起しなくても非文にならないこともある。

18'. *el-ṣarabiyya di bet-et-sa:?*
def-car this imperf.fem-intr-drive
 (lit.) This car is driven.

例文(18')では、上記の例文と異なり、副詞が使用されていないにもかかわらず非文ではない。これは状況が許せば表現できるが、例えば、古くて使えない車が並んでいる車両博物館の中で今も運転している車を指すという状況なら「この車は（今でも）運転できる」

という意味でとても自然な表現となる。

【他動詞構文】

EA も他動詞構文で中間的な表現が存在し、SA のように事象の道具が主語になる場合に限る。

19. el-yassa:la di / es's'abu:na da biy-eyssel helw.
 def-washing machine this / def.soap this imperf.ml-wash good
 This washing machine/this soap washes well.

このように、ある事象に対して実現のカギを握る道具は agent 化し他動詞の形態が用いられる。

【道具ではない他動詞構文】

上述したように、事象の対象が中間構文では主語になるが、その場合他動詞に et-接辞が付与され、動作主が削除される。しかし、以下の例文で見るように、事象の対象が主語に昇格しても他動詞の形態がそのまま用いられる。

20. eɟʃaʔʔa di bet-iskun bisurʃa
 def.apartment this imperf.fem-occupy quickly
 (lit.)This apartment occupies quickly.
 (mean.)This apartment is occupied quickly.

20'. eɟʃaʔʔa di bet-et-sikin bisurʃa
 def.apartment this imperf.fem-intr-occupy quickly
 (lit.)This apartment occupies quickly.
 (mean.)This apartment is occupied quickly.

21. el-kita:b da biy-ybi:ʃ ʃala tu:l
 def-book this imperf.ml-sell always
 This book always sells.

21'. el-kita:b da biy-et-ba:ʃ ʃalatu:l
 def-book this imperf.ml-intr-sell always
 This book always sells.

上記の例文(20,21)はそれぞれ不動産や本屋の業界で用いられる表現であり、一般人が同じ事実を表す場合は、例文(20',21')が用いられる。本や不動産の見方は、本の販売業界や不動

産屋と一般人では異なり、前者にとって販売の対象は商業を動かし商売がうまく行くかどうかを決める重大な要素である。事象の対象が昇格しても他動詞が用いられるのは事象を動かす力を持つと認識し、売り手として大した努力しなくても勝手に本が売れる、あるいは、人がアパートに入るなどと言う見方が想像できる。一方、一般人が使う表現は、*et*-接辞が付与された構文となるが、*et*-接辞の本質的な機能は上述したように、動作主を削除し「変化」を表現することである。一般人は消費者として「本」や「アパート」を評価し、その過程で「本が良く売れる」や「アパートに住居者がすぐに入る」などという評価により認知的な変化が生じると考えられる。

3. まとめ

本稿では、SA 及び EA における中間構文を分析した。

SA には、3 種類の中間構文が存在し、主語の種類と動詞が表す意味内容との関わりにより使用する構文が決まることを主張した。一つ目は、受身形態の動詞を使った受身中間構文、二つ目は、自動詞を使った自動詞中間構文、三つ目は、他動詞形態の動詞を使った他動詞中間構文である。

受身中間構文は、主語の指示対象の特性について語る構文であり、英語の中間構文の多くに対応する構文である。SA の受身においては、動作主が、動詞が表す意味内容に対し意図を有するものとして解釈されることが最も自然である。この類の中間構文は、主語の指示対象の特性を表すと共に、当該の事態が動作主の意図及び行為によって実現されることを表す。

自動詞中間構文は、「走る、歩く」のような非能格自動詞ではなく、「壊れる、割れる」のような非対格自動詞が使用される。SA において、この類の非対格自動詞は、自動詞化接辞 *in*-により他動詞から生産的に派生されるが、このような自動詞は、何らかのきっかけがあって、主語の指示対象の内在的特性によって事象が成立することが含意されている。本構文では、動作主がきっかけとなっても良いが、主語の指示対象の内在的特性・能力が事象の実現に関わる重大な要素となる。

他動詞中間構文は、動詞は他動詞のまま使用されるが、主語の指示対象として出現するのは、事象を実現する道具であり、英語の疑似中間構文に当たる。

SA の 3 種類の中間構文に対して、EA における中間構文は 2 種類存在する。一つは、自動詞化接辞 *et*- (EA では *en*-と発音される) を使用したものである。*en*-の意味特徴は基本的に EA の機能を保持しながら、「変化」も表すようになった。EA において、殆どの中間構文はこの自動詞構文が用いられる。

2 つ目の構文は他動詞を使った他動詞中間構文である。この構文は SA の他動詞中間構文と類似しており、道具が主語として昇格する構文である。

今後の課題として、このような SA 及び EA の中間構文をアフォーダンスによってどのように説明するかは考察する価値があると思う。

凡例

acc	accusative
def	definitive particle
fem	female
gen	genitive
imp	imperative
imperf	imperfective
intr	intransitive
ml	male
nom	nominative
pass	passive
perf	perfective
ref	reflexive noun
sing	singular
tr	transitive

参考文献

- Abdelgawad, T. Mahmoud (1991) "A Contrastive Study of Middle and Unaccusative Constructions in Arabic and English", *Perspectives on Arabic Linguistics III*. 119-134. ed. by Bernard Comrie & Mushira Eid, John Benjamins Publishing Company.
- Croft, W. (1991) "Verb Forms and the Conceptualization of Events", *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, the University of Chicago press..
- Givon, T. (1990) *Syntax: A Functional Typological Introduction Volume II*, John Benjamins Publishing Company.
- ハッサン・エバ (2015) 『標準アラビア語及びエジプトアラビア語における動作主の脱焦点化について』 東京大学. 博士論文.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論：生体心理学から見た文法現象』 東京大学出版会.
- Keenan, E.L. (1985) "Passive in the World's Languages", in Shopen, T. (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, Cambridge University Press, 243-281.
- Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice*. John Benjamins Publishing Company.
- Langacker, R. W. & Munro, P. (1975) "Passives and Their Meaning", *Language* 51, 789-830.
- Lyons, John (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University press.
- 坪井剛 (2005) 「英語中間構文の意味構造」『認知言語学論考 No.5』 ひつじ書房. 79-118.
- Valfells, Sigridur (1970) "Middle voice in Icelandic. *The Nordic Languages and Modern Linguistics 1*, ed. By Hreinn Benediktsson, 551-572. Reykjavik: Visindafelag Islendinga.

The Middle Construction in Standard Arabic and Egyptian Dialect

Eba Hassan
ebahssn@gmail.com

Keywords: middle construction, Arabic, passive construction, intransitive, transitive

Abstract

It is commonly believed that standard Arabic does not have any middle constructions. This paper is intended to show that both standard Arabic and Egyptian Arabic do have constructions that are used as equivalents of middle constructions in English and Japanese.

The first construction in standard Arabic to be discussed is the passive construction, where the object of its active counterpart is promoted to subject position. The second construction is the intransitive verb construction, which portrays the event described as occurring mainly due to the intrinsic property of the object, downplaying the contribution that may be made by the agent. The third to be examined is the transitive construction, equivalent to the pseudo-middle construction in English, where the instrument used in the event is promoted to be the subject.

I argue that Egyptian Arabic has two middle constructions: the intransitive construction and the transitive construction which has much the same properties as that of standard Arabic.

(ハッサン・エバ 国際基督教大学)